

Back Number

本論文は

世界経済評論 2023 年 5/6 月号

(2023 年 5 月発行)

掲載の記事です

2023年5月15日発行(毎月(第2月)発行)
150頁・送料720円
世界経済を読み解く国際戦略の羅針盤
世界経済評論 5・6月号
2023 Vol.67 No.3
World Economic Review



世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読
期間中

デジタル版バックナンバー読み放題!!



世界経済評論 定期購読



0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp

雑誌のオンライン販売

食物連鎖で成り立つ世界



佐藤 紘彰

北九州は八幡に住む姪が言う。

「庭仕事をしていると土の中から時々出てくるコガネムシの幼虫は植物や樹木の根を食べるので園芸の本では駆除の仕方が書いてあるけど、うちは、父も母も幼虫を見つけると、邪魔にならないところに移動させて、こっちにおってね〜、と声をかけるような人だった」。

不倶戴天

そこでインターネットを見ると、確かに姪の言う通りである。「超重要：コガネムシの幼虫被害から救え!」「コガネムシ幼虫対策：怖いコガネムシを退治しよう」「コガネムシの幼虫『ネキリムシ』大量捕獲駆除の方法」「2匹で全滅：この虫が鉢にいたらアウトです」等々、この昆虫を不倶戴天と見做すサイトがざわざわ出てくる。

中に、「カマ太郎が最後、食べられなかったコガネムシの幼虫を育てて」というものもある。「カマ太郎」は、見ると、蟻螂のこと。このサイトではコガネムシの幼虫が蛹に変わり成虫になって、飛び去るまでを示す。だが、この類のものは少ない。

これで思い出す。ぼくが1960年代末にアメリカに来て数年たったころ、「森林破壊の元凶 Japanese beetle」と聞いて驚いた。Japanese beetle すなわち黄金虫だったからだ。来る前の日本では黄金虫から「金持ちだ」という歌が口に出ても、害虫という見方が一般化していなかったのか。もししていなかったとすれば、当時の日本では「園芸」が今ほど盛んでなかったのかもしれない。あるいは、草花を植えれば何かの虫がつくのは当然と思っていたのだろうか。

1970年代になると、日本からの輸入がマスコミで騒がれる他に、日本は鯨を殺す、けしからんと叫んでいた。だから、黄金虫まで問題にするの

かとぼくは残念だったが、ここでは1960年代の公害問題の高まりで1970年には政府が環境保護庁を設置、それに続いて自然保護が前面に出ていた。当時はまだ「侵入物 invasives」という用語はなかったが、自然保護の呼び声が高まるとともに、人間以外の動植物それぞれについて良し悪しを決める傾向が強まっていた。

いま見ると、Japanese beetle (Popillia japonica) は黄金虫 (Mimela splendens) とは少し異なり、小型で日本では「豆黄金」と呼ぶとある。そのマメコガネが日本からアメリカにやってきたのは1912年、その幼虫が菖蒲の球根にくっついてやってきたと言う。

姪は続けている。

「弟はファーブル昆虫記が大好きな子供で、昆虫博士のようだったし」。

そう言われて、その甥充彰の人好きする大きな目の笑顔がふと脳裏に浮かぶ。ぼくが日本を出た頃は小学校に上がる前後だったはずで、ファーブル昆虫記に熱中するのはその後だろうが、両親公彦・暢子の虫や昆虫に対する温かさもあったにちがいない。

ぼくは残念ながらファーブルは読まぬままに人生を過ごしてしまったが、世界的な昆虫の減少、死滅というので買った本の一つに Seirian Sumner 著『無限の体形 蜂の秘密世界』Endless Forms: The Secret World of Wasps (2022年出版)がある。そこに、ジャン・アンリ・ファーブルは「世界で最も有名な蜂の説得者 (wasp whisperer)」として出てくる。ある種の虫の観察に用いたお椀をひっくり返したような容器にしわくちやの爺さんが覗き入る写真が添えてある。

Seirian「輝き」という名を持つこの昆虫学者

は湿気の多い西ウエールズで育ち、庭にはナメクジがたくさんいた。それで、よちよち歩きのころ、ある時一匹つまんで口に入れて食べてお母さんを怖気させたことがあるという。この土地でもナメクジといえば嫌がって塩をかぶせる。人はナメクジを「自然がどのように必要とするか、舞台裏でひとのためにどういうことをするか」を考えない。その他の生き物も好かぬと決めれば化学薬品をふりかける。

この輝く女性は、ナメクジを経て、動物学、昆虫の社会性を追求、ハチの研究で博士号を取得した。ただ、ハチといっても bees ではなく wasps の方である。bees は（日本では）ハナバチやミツバチ、wasps はスズメバチやジガバチなどと呼ばれるようだ。だから、bees とといえば蜜を考え、wasps とといえば針で刺される痛さを思う。西欧では昔から wasps を悪者とする伝統がある。自分も蜂を当初は嫌い、避けようとした。

事実、bees が人間に役立つことは誰でも知っている。しかし wasps が「食欲旺盛な捕食者 predators」で「自然の pest control」の大切な役割を果たし、bees と同じく送粉者 (pollinators) としても重要な役割を果たすことを考える人は少ない。bees 同様、wasps がいなくなったら大変なことになるのだ。

ちなみに、bees は世界で2万2000の種 (species)、wasps は10万種が知られている。bees は wasps が狩る能力を失ったもの、蟻の祖先も wasps という。

過剰反応

ところで、人間はなぜ生き物を人間に好ましいものとそうでないものに分けて、好ましくないものは、その駆除、制御、絶滅にかかるのだろうか。

ここマンハッタンの最近の例では stink bug と lanternfly がある。両者とも「侵入！」が騒がれたが、前者は「屁こき虫」。侵入といっても、ほとんどの場合、窓ガラスに一匹か二匹みた程度で、ほ

くはそつと指先に移して窓の外に放った。

後者 lanternfly は「琵琶羽衣」という優雅な名を持つ。昨年夏、ある日屋上庭園に上がると、何匹もの死骸がころがっていた。ほとんど昆虫が来ない屋上では、それが生き物のいたことを証明するようで、ほくは安心した。

今インターネットを見ると、去年8月にはニューヨーク・タイムズ紙が「琵琶羽衣戦争では虫の肩を持つ人もいる In the Lanternfly War, Some Take the Bug's Side」という記事をだしている。記事に言葉を引かれる人には「戦争」は例によって overkill だと指摘する人 Jody Smith もいた。また、この虫を見ると他の人が踏み潰す前にひろって隠す人もいた。この Lee Weiss は仏教哲学を教えたこともあるという。

食物連鎖

こうした中で、今年選集を拙訳で出す歌人石井辰彦さんに去年ここにてた拙文「昆虫の激減」を送ったら、「確かに私の周囲でも昆虫は激減しましたね。夏から秋にかけての蟬と秋の鳴く虫は、まだ辛うじて存在感を示していますが」との返事。

すると偶然、翌日の2月3日、ワシントンポスト紙に「東アジア、肝要な昆虫大きく減少：調査報告 Essential insects in East Asia have declined massively, study finds」との記事が出た。中国農業科学学術団体の調査によると、2003~2020年にわたって幼虫がキャベツやトウモロコシを食べる蛾その他ほぼ100種の昆虫を調べたところ、中国から渤海を渡って韓国、日本に渡る昆虫は8%減、夏季にはトンボなどそれらの捕食者が20%減った。

要するに、ある種の昆虫を殺すとそれを食べる昆虫が死ぬ。世界は食物連鎖で成り立っており、鎖の一つを壊すと他の鎖をダメにしてしまうという。

この調査結果は米国科学振興協会の機関紙 Science Advances に出た。

さとう ひろあき 翻訳家、コラムニスト在NY